

2022年合同教育研究全道集会 第11分科会 報告

「学校保健の果たす役割を考える ～子どもの実態を紐解き、保健実践につなげよう」

道教組養護教員部 和田千鶴子

1. はじめに

ロシアによるウクライナ侵攻、北朝鮮による度重なるミサイル発射、韓国梨泰院地区でのハロウィン事故、また国内では、円安による経済不安や物価の高騰など、新型コロナウイルス感染症の発生から、もうすぐ3年が経とうとしていますが、心穏やかに生活できる日がいつ来るのでしょうか。学校現場では不登校やいじめの増加、深刻な教員不足など課題が山積しています。

本校では先日4泊5日の見学旅行に行ってきました。コロナ禍では初の従来どおりの行程の旅行でした。コロナ予防のため、全員が体温計を持参し体温チェックを欠かさず、移動バス内でのおやつは禁止などの制限を設けました。子どもたちの様子を見てみると、日を追うごとに、時間前行動や挨拶などがよくなっていき、キビキビと動く子どもたちの姿がありました。

帰着後、保健室に来る子どもたちに旅行の感想を聞いてみると、「仲良しの人たちで班になって行動した。疲れるとイライラするのはわかるけど、もう少し我慢してほしいとか遠慮してほしいという場面があった。」「班分けの時にクラスでかなりもめたけど、旅行中は普段話さないクラスの人とたくさん話せて、以外にみんな話しやすいことを知った。」「これからは今までよりクラスの人たちと仲良く出来そう」など様々であった。子どもたちは、私たち教員が望む以上の学びと成長を遂げていると感じました。

保健室から見える子どもの課題は様々です。そして保健室から見える子どもの成長もたくさんあります。そんな子どもたちからエネルギーをもらいながら、日々子どもたちに寄り添っていったらと思います。

まだまだ先行き不透明な日々が続きますが、子どもたちのキラキラと輝く瞳と豊かな成長に希望を託して、私たちは一步一步大切に進み続けるしかありません。今年も、皆さんのレポートから子どもの実態を紐解き、様々な実践から学び、語り合いたいと思います。

(北海道旭川商業高等学校 高松葉子)

2. レポート発表から

(1) 血圧を体感しよう～6年生保健学習「病気の予防」から～ O氏(松山教職員組合)

養護教諭が担当した6年生の保健学習「病気の予防」の授業実践である。日本人に多い死因は脈管系の病気であることから、「ドロドロ血チェックシート」で生活習慣とのかかわりを意識させ、手動式灯油ポンプを心臓と血管に見立て健康な血管と梗塞が起きた血管をわかりやすく提示することで、児童の理解を深めている。また、地域の保健師と連携し、その

地域に住み、育つ子どもたちへの健康教育につなげていることが注目すべき点である。さらに、O氏は健康な生活を送り成長するためには、その前提に「命」「生活」「平和」を守ることが大切であると子どもたちに伝えたいという思いで、保健学習のまとめの時間などの機会をとらえ指導している。

(2) 救急処置事例の反省点と疑問点

N氏（上川教職員組合）

頭部打撲で救急車要請をした事例から、今後に活かすためにいくつかの視点と反省点と疑問点をまとめたレポートである。時系列で状況、症状、対応を追っていき、その後判明した事故の状況と周りの人からの情報や本人の記憶をすり合わせている。すべての疑問点の解決には至っていないが、一つ一つ見立てと疑問を出していくことで、今後の対応に大いに役立つ振り返りである。

「救急処置での大きなミスは、それまでの信用を一瞬で失ってしまう」という先輩の言葉を肝に銘じ、一つ一つ振り返るN氏の姿勢とここで出された事例については、日々応急処置に対応している養護教諭にとって「基本の大切さ」をもう一度意識させてくれるものであった。

(3) 保健室で関わる生徒の対応

W氏（宗谷教職員組合）

日々の保健室の様子を利用状況と健康診断結果ともちこまれる相談内容から報告している。LGBTQやメンタルからくる体調不良、自傷など、体の不調を理由にいつでも来られる保健室ならではの特性を活かして、生徒が相談しやすい雰囲気を作ろうとしている。生徒が客観的に自分の状態を見られるように「不調を伝えるシート」などを活用している。寄り添う保健室にしたいが、寄り添っているようで甘やかしているのではないかと、同時に甘やかしとみられているのではないかと悩みが語られている。

(4) 見学旅行での食物アレルギーに関する個別の保健指導について

N氏（高教組）

高校の見学旅行で食物アレルギーを持つ生徒に行った対応のレポートである。事前に本人と行程や食事内容を面談で確認し保護者のチェックを受け、引率団と情報共有を丁寧に行っている。単にアレルギーを含む食べ物を避ける視点だけでなく、摂取してしまい症状が出た場合にどうしたら良いか、生徒本人の気持ちも大事にしながら確認をしている。さらに、一緒に行動する友人との関係性も考慮し協力を得られるように配慮しているところが生徒の命を守ることに繋がっている。宿泊行事を児童生徒が安心安全に参加できるためのプロセスを改めて学ぶことができた。

3. 討議から

【保健教育】

保健教育は、保健の時間だけでなく学活の中で、朝の会や帰りの会の中で、保健室で、掲示物で、保健だよりなどで様々な場面で展開されるものである。そして、小学校から高校まで発達段階をふまえて行われる。その結果はすぐに出るものだけでなく、子どもたちが大人になった時に効果が表れるものでもある。今回、O氏からは「生活習慣病の予防」を自分事としてとらえてもらうための「教材の工夫」と指導に使ったものをその後掲示することで「振り返る機会」を作ることを学んだ。参加者からは、わかりやすい教材は小学生のみならず中高生に対しても理解を深めるものになりそうだ、チェックシートを保健だよりに載せたい、子どもへの指導を通して大人にも知ってもらいたい、小さいうちからの指導が大切だと思ったなどの意見が交流された。

その地域で育つ子どもたちの生活や健康について、地域の関係機関との連携は重要になっている。保健師や歯科衛生士、市町村保健センターや保健所との協力関係を作り情報交換をすることで、健康問題の解決、虐待防止、性教育の充実につながるとO氏は語っている。養護教諭が感じている児童生徒の健康問題と保健師が感じている住民の健康問題をすり合わせ、それぞれの立場で取り組みがされることで、子どもたちが育って大人になった時に、健康に生活できることにつながるのではないか。

新しい検診機器として、スポットビジョンスクリーナー（画面を見るだけで屈折異常や視線の異常がわかる。視力は測れない。）の就学児検診や眼科検診での導入の情報提供があったことを付け加える。

【救急処置と体育のケガ】

N氏のレポートでは、救急処置における基本を大切にすることと、その後の検証をすることで次につながることでできる症例検証となった。脳損傷を疑って行う瞳孔反射では、普段からチェックすることで違和感を感じ取れ、その後の対応に活かすことができたというN氏は語っており、普段から「正常」と「いつもと違う」を見極める目を養うことは必要である。

参加者からは、頭部打撲時に気を付けることも含めて、様々なケースの交流がされた。状況によっては動かさないで、その場にとどめて応急処置や救急搬送する場合や、そこまででない場合は付き添いをつけて保健室に行かせると良いこと、目の打撲や鼻の打撲も頭のケガとして扱って付き添ったほうが良いことが交流された。救急処置は迷うこともたくさんあるが、結果が最善となるよう研修を深めなければならない。

また、小児への被ばくりスクを考えた検査の在り方について、東日本大震災による福島原発事故による被曝の子どもへの影響から、頭部打撲時も必要最低限の検査にとどめる傾向にあり、医療機関の検査と子どもの健康についても考える機会となった。

体育では、小中高共通して、マット（首・鼻）、ハードル、跳び箱、高校では柔道のケガも多いという交流がされた。走りながら飛び越えられない子が多いという高校の実態もあ

る。走り方から始めたり、ミニハードルから始めたり、飛び越える面がゴムになっているものを使ったりする。体の使い方、ケガの予防、ケガの処置は体育教師と養護教諭が協力しなければならぬところであり、お互いに発信して共有していきたい。

高校の体育では、柔道、水泳、機械運動、そして体力テストなども危険リスクを考えてやめ、軽めの球技や陸上を中心にやる傾向にあるようである。小さいころからの外遊びの少なさ、体を使う機会の少なさから、しなやかな動きができずケガをしてしまう子が多い。ケガ予防観点からカリキュラムを安全なものにしていく視点とケガを予防しながらも体をうまく使えるようにするためにできることを模索していくことが望まれる。

【保健室での子どもの対応】

各校の保健室に来室する子どもの様子が語られた。

周りがうるさくて教室にいられない子、イライラしている子、勉強が嫌で教室にいられない子、夜中までゲームをやっている子。また、同じクラスにいるマスクをしない子が気になって「だから自分は教室に行けない」といって保健室にくる子。何度も保健室にくる子にどう対応していけばいいのかと悩む毎日を過ごす養護教諭はたくさんいる。

ある講演を聞いた先生は、「保健室に来るだけで大成功。保健室があるから学校に来て、保健室があることがこの子にとってどんないいことになっているか。この先何かするとしたら、一人一人の子をアセスメントしてどういう特性があって、どういう時にうまくいくのかを見極めて、ゴールをどこに設定するのかという事を考えて対応するとよい。」と教えてもらったと伝えてくれた。

中高では、進路との兼ね合いもあり、学校に来るだけでいいと思いたいが、そのジレンマがある。

誰にも相談できなくて過ごしている子が、何回か来ているうちにここだったら話せるかなと思って話していける保健室が子どもを救うことになる。1人の子どもを担当だけ、養教だけで抱えるのではなく、保健室の役割として子どもと関わる中で得た情報を担任と共有し、その先を一緒に考えていくことができればと思う。

甘やかしているのではないか、受け入れすぎているのではないかと思って悩んでいる養教も多いが、子どもの安心できる居場所となり、その先に進む第一歩となることを信じて対応していきたい。

【宿泊行事のアレルギー対応】

近年、アレルギーを持つ児童生徒は増えており、特に食物アレルギーに関しては原因となる食品が様々で、毎日の給食指導における対応は気が抜けない。宿泊行事ともなれば食物アレルギー対応は発達段階に応じて事前準備、事前指導と旅行中の対応をしていかなければならず、一層の注意を払わなければならない。

エピペンを持つ症状の重いアレルギーの場合、アレルギーを口に入れなくても、アレルギー

ンになるものを使って調理している近くにいるだけで発作を起こすこともある。小中学校では宿泊行事に養教が引率することが多くその場での対応もできるが、高校では養教が引率しないことも多く事前の準備がカギとなる。

各校、エピペンの使用期限の確認、エピペンの使い方の研修、アレルギーを食べてしまった時や症状が出た時にどうするかの確認、旅行会社との情報共有、代替え食の確認など、保護者とだけでなく本人との確認など様々な対応をしている様子が交流された。今回、N氏のレポートからは、本人の指導だけでなく同じ班の生徒にアレルギーのことを知ってもらい、本人が安心できる状況を作っていく視点を学んだ。

担任や養教や保護者の管理でアレルギー対応をする段階から、少しずつ自分で選んで食べていけるようにならなければならない。自分で選択できるように、何に気を付けなければならないのかを一緒に考えてくれる人がいることが、その子が安心して色々なことに参加できることにつながる。そして、まわりの病気の理解がお互いに助け合え、命を守ることになる。

4. おわりに

昨年は2年ぶりに分科会がリモート開催され、今年こそは対面だと願っていたが、コロナ禍3年目となっても終息のめどは立たず、昨年に引き続きリモートでの開催となった。そのような状況ではあったが、今年も小中高の養護教諭からのレポートが出され、様々な視点からの実践報告と今の子どもたちの置かれている状況、そして各教員・養護教諭の悩みが見える交流となり、たくさんの学びとなった。

社会情勢の変化や家庭生活の変化、学校教育の変化の中で、子どもの置かれている状況や心や体の変化はこれまでも語られ、私たちもそれに対応すべく実践を深めてきた。しかし、コロナ禍で人と人との距離を置き、なるべく外に出ない生活を余儀なくされ、ICTの活用を促す生活で子どもたちの心身の変化に拍車がかかった。体を動かす機会を奪われ、人と関わることを奪われてきたこの3年間。ようやく社会が戻り、色々な教育活動が再開されてきたが、その代償となった子どもたちの変化は注意深く見ていかなければならない。

保健体育分科会という特性から体育の授業とケガとの関係性について話題となった。単なる「ケガをさせない体育と応急処置」という問題だけではなく、「より良い子どもの心身の育ち」ともあわせて考えていきたい課題であるし、近年多くなっている起立性調節障害の対応も今後交流していきたいものの一つである。

来年こそは対面で開催がされ、全道各地の仲間と集い、実践の報告と課題の深め合いができることを願うものである。